



巻頭言

ある幼稚園と小学校の 交流活動から学んだこと

河邊貴子

東京都心に立地するA幼稚園は小学校に併設されており、日ごろから幼小の交流が盛んです。その日は、小学五年生による幼稚園の園児たちへの絵本の読み聞かせ交流の二回目でした。五年生が絵本を選び、パートナーとしてあらかじめ決まっている幼児と共に二十分間を過ごします。

五年生の中田君は活動の前に「僕には妹がいて、いつも親に本を読んでもらっているから、それをまねてうまくやりたいです」と決意を書いていました。中田君のパートナーは四歳児のアヤちゃんです。初め、二人は緊張気味に少し距離をとって向き合っていました。ところが次第に近づき始め、絵本半ばではほとんど膝頭がくっつくくらいに接近しました。そして、絵本の場面が「猟師が鳥をいけどる」というところになると、中田君は突然絵本から顔を上げて「いけどるってわかる？」とアヤちゃん



に聞いていました。自分で読みながら「幼児はこの言葉を理解できるのだろうか」と考えたのでしよう。

アヤちゃんからは「わかるよ。だって私、漢字が書けるもん」と、少しビントが外れた無邪気な答え。中田君は少しびびくりした様子でしたが、すぐに表情を崩してアヤちゃんの顔をのぞき込み、ゆつたりとした口調で「すごいねえ」と受け止めたのです。中田君は幼児を慈しみ、「幼児の理解」を理解して行動しました。「親をまねてうまくやりたい」という決意を実現した姿でした。

中田君のペアだけではありません。相手の様子に合わせたり、受け止めたりする姿がそこに見られた交流活動となりました。「幼稚園の子どもを楽ませたい」と書いた小林さんは、モモちゃんが絵本に描かれたごちそうを食べるまねをする間中、じっとページを開いて待っていました。「読んで楽しくなるような絵本の読み方をする」と書いた石崎君は、ハルト君が絵を指さしながら確認するようにつぶやいた「入ってるね」という言葉を聞き逃さず、「うん、入っているね」と同じ言葉を返していました。「楽しませたい」「優しくしたい」というような抽象的な希望や心情を、どう表したら相手に伝えられるか。五年生は状況の中で、見事にそれぞれのやり方をもって具体的言動へと変換しました。

第一回目の読み聞かせ活動のときには、園児の反応などはお構いなしに読み進めていた児童が多かったのに、相手の状況に合わせて「振る舞い」を修正した五年生と、



五年生が来るのを楽しみに待ち、自分の思うことを状況に応じて伸びやかに表現していた幼児です。私はこのA幼稚園・小学校の幼小連携研究に参加するたびに、双方の学びは交流の結果にあるのではなく、交流そのものの状況の中にあるという実感を深めています。

子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方として、「発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の充実」（平成十七年中央教育審議会答申）が打ち出されて以降、幼小連携の研究が国公立幼・小を中心に全国で行われています。幼稚園から小学校へと段差のないカリキュラムの作成を目指している研究もありますし、指導方法の連続性についての研究もあります。これらの研究を概観するとき、明らかにすべき大きな問題があることに気づかれます。それは「学びとは何か」ということです。私はある会議で、小学校の先生から「これからは幼小の学びの連続性が重要だから、幼稚園卒園時には四十五分間座れるように教育してほしい」と言われて驚いたことがあります。「学び」をどうとらえるかによって「連続性」のとらえも変わり、その具現化を目指す方策も変わることは明らかです。幼児教育は小学校教育の基盤としてのみならず、生涯にわたって必要な基盤を形成する教育です。五歳児から小学校一年生への接続というように「連続性」を矮小化してしまうと、このような幼児教育への表層的な要望が生まれてしまうのです。



私には「学びとは何か」という教育学の大命題に明快に答えることはできません。

しかし、A幼稚園と小学校の連携研究から気づかされるのは、そのことを考えるならば、状況の中で彼らの振る舞いがどう変化し決定されていくかを、子どもたちの言動の中からできるだけいねいに拾い上げることが重要だということです。

「小学生になる」、これは幼児自身が自覚する人生初めての「ハレ」ではないでしょうか。幼児にとつてそれは「昨日」の続きの「明日」ではなく、飛躍の「節目」なのです。もちろん、幼小間に乗り越えられないような段差があり、それに足を取られて育ちが後退するような教育は認められません。しかし、人はそこに「異なり」が横たわるからこそ、大きく飛躍できる場合もあります。幼児と小学生とは思考のプロセスや理解の仕方に「異なり」があり、教育の方法は共通ではありません。私たちに期待されているのは、段差を全て均してしまうことではなく、「異なり」を積極的に取り込み、そこに自分の居場所を見つめる力を身に付けられるようにすることではないかと考えます。小学校側は幼児教育で育ってきた力を信じて教育を展開することです。

全国の年長児が胸いっぱい希望をつめ込んだ三月となりました。子どもたちは幼稚園（あるいは保育所）の生活を充分に楽しんで修了を迎えていることでしょう。幼児教育に携わる私たちにとっては、新幼稚園教育要領完全実施という節目を迎えます。幼児期の教育が、幼児にふさわしい生活の中で十全に展開されるよう、英知を合わせるときです。

（聖心女子大学）